

タイトル

巻数

作者

サンプルサークル

毒もみのすきな署長さん宮沢賢治 四つのつめたい谷川が、カラコン山の氷河から出て、
ごうごう白い泡をはいて、プハラの国にはいるのでした。四つの川はプハラの町で集って
一つの大きなすかな川になりました。その川はふだんは水もすきとおり、淵には雲や樹
の影もうつるのでしたが、一ぺん洪水になると、幅十町もある楊の生えた広い河原が、恐
ろしく咆える水で、いっぱいになってしまったのです。けれども水が退きますと、もとの
きれいな、白い河原があらわれました。その河原のところどころには、蘆やがまなどの岸
に生えた、ほそ長い沼のようなものがありました。それは昔の川の流れたあとで、洪水
のたびにいくらか形も変わるのでしたが、すっかり無くなるということもありませんでした。
その中には魚がたくさんおりました。殊にどじょうとなまずがたくさんおりました。けれ
どもプハラのひとつたちは、どじょうやなまずは、みんなばかにして食べませんでしたから、
それはいよいよ増えました。なまずのつぎに多いのはやっぱり鯉と鮒でした。それから
はやもおりました。ある年などは、そこに恐ろしい大きなちようぎめが、海から遁げて入
って来たという、評判などもありました。けれども大人や賢い子供らは、みんな本当にし
ないで、笑っていました。第一それを云いだしたのは、剃刀を二挺しかもっていない、下
手な床屋のリチキで、すこしもあてにならないのでした。けれどもあんまり小さい子供ら

は、毎日ちようざめを見ようとして、そこへ出かけて行きました。いくらまじめに眺めていても、そんな巨きなちようざめは、泳ぎも浮びもしませんでしたから、しまいには、リチキは大へん軽べつされました。さてこの国の第一条の「火薬を使って鳥をとつてはなりません、毒もみをして魚をとつてはなりません。」というその毒もみというのは、何かと云いますと床屋のリチキはこう云う風に教えます。山椒の皮を春の午の日の暗夜に剥いて土用を二回かけて乾かしうすでよくつく、その目方一貫匁を天気の良い日にもみじの木を焼いてこしらえた木灰七百匁とまぜる、それを袋に入れて水の中へ手でもみ出すことです。そうすると、魚はみんな毒をのんで、口をあぶあぶやりながら、白い腹を上にして浮びあがるのです。そんなふうにして、水の中で死ぬことは、この国の語ではエツプカツプと云いました。これはずいぶんいい語です。とにかくこの毒もみをするものを押えるということは警察のいちばん大事な仕事でした。ある夏、この町の警察へ、新しい署長さんが来ました。この人は、どこか河瀬に似ていました。赤ひげがぴんとはねて、歯はみんな銀の入歯でした。署長さんは立派な金モールのついた、長い赤いマントを着て、毎日ていねいに町をみまわりました。驢馬が頭を下げてると荷物があんまり重過ぎないかと驢馬追いにたずねましたし家の中で赤ん坊があんまり泣いていると疱瘡の呪い

を早くしないといけないとお母さんに教えました。ところがそのころどうも規則の第一条を用いないものができてきました。あの河原のあちこちの大きな水たまりからいつこう魚が釣れなくなつて時々は死んで腐つたものも浮いていました。また春の午の日の夜の間、に町の中にたくさんある山椒の木がたびたびつるりと皮を剥かれておりました。けれども署長さんも巡査もそんなことがあるかなあというふうでした。ところがある朝手習の先生のうちの前で草原で二人の子供がみんなに囲まれて交る交る話していました。「署長さんにうんと叱られたぞ」「署長さんに叱られたかい。」少し大きなこどもがききました。「叱られたよ。署長さんの居るのを知らないで石をなげたんだよ。するとあの沼の岸に署長さんが誰か三四人とかくれて毒もみをするものを押えようとしていたんだ。」「なんと云つて叱られた。」「誰だ。石を投げるものは。おれたちは第一条の犯人を押えようと思つて一日ここに居るんだぞ。早く黙つて帰れ。つて云つた。」「じゃきつと間もなくつかまるねえ。」ところがそれから半年ばかりたちますとまたこどもらが大きすぎです。

「そいつはもうたしかなんだよ。僕の証拠というのはね、ゆうべお月さまの出るころ、署長さんが黒い衣だけ着て、頭巾をかぶつてね、変な人と話してたんだよ。ね、そら、あの鉄砲打ちの小さな変な人ね、そしてね、『おい、こんどはもう少しよく、粉にして来なくち

やいかんぞ。』なんて云つてゐるだろう。それから鉄砲打ちが何か云つたら、『なんだ、柏の木の皮もまぜておいた癖に、一俵二両だなんて、あんまり無法なことを云うな。』なんて云つてゐるだろう。きつと山椒の皮の粉のことだよ。」すると一人が叫びました。

「あつ、そうだ。あのね、署長さんがね、僕のうちから、灰を二俵買ったよ。僕、持つて行つたんだ。ね、そら、山椒の粉へまぜるのだろう。」「そうだ。そうだ。きつとそうだ。」みんな手を叩いたり、こぶしを握つたりしました。床屋のリチキは、商売がはやらないで、ひまなもんですから、あとでこの話をきいて、すぐ勘定しました。 毒も

み収支計算 費用の部 一、金 二両 山椒皮 一俵 一、金 三十銭 灰 一

俵 計 二両三十銭也 収入の部 一、金 十三両 鰻 十三斤 一、

金 十両 その他見積り 計 二十三両也 差引勘定 二十両七十

銭 署長利益 あんまりこんな話がさかんになって、とうとう小さな子供らまでが、巡査を見ると、わざと遠くへ遁げて行つて、「毒もみ巡査、なまずはよこせ。」なんて、

力いっぱいからだまで曲げて叫んだりするもんですから、これではとてもいかんというので、プハラの町長さんも仕方なく、家来を六人連れて警察に行つて、署長さんに会いました。二人が一緒に応接室の椅子にこしかけたとき、署長さんの黄金いろの眼は、どこか

ずうつと遠くの方を見ていました。「署長さん、ご存じでしょうか、近頃、林野取締法の第一条をやぶるものが大変あるようですが、どうしたのでしょうか。」「はあ、そんなことがありませんか。」「どうもあるそうですよ。わたしの家の山椒の皮もはがれました、それに魚が、たびたび死んでうかびあがるというではありませんか。」すると署長さんがなんだか変にわらいました。けれどもそれも気のせいかしらと、町長さんは思いました。「はあ、そんな評判がありますかな。」「ありますとも。どうもそしてその、子供らが、あなたのしわざだと云いますが、困ったもんですな。」署長さんは椅子から飛びあがりました。「そいつは大へんだ。僕の名誉にも関係します。早速犯人をつかまえます。」「何かおてがかりがありますか。」「さあ、そうそう、ありますとも。ちゃんと証拠があがっています。」「もうおわかりですか。」「よくわかってます。実は毒もみは私ですがね。」署長さんは町長さんの前へ顔をつき出してこの顔を見ろというようにしました。

町長さんも愕きました。「あなた？ やっぱりそうでしたか。」「そうです。」「そんならもうたしかですね。」「たしかですとも。」署長さんは落ち着いて、卓子の上の鐘を一つカーンと叩いて、赤ひげのもじやもじや生えた、第一等の探偵を呼びました。さて署長さんは縛られて、裁判にかかり死刑ということにきまりました。いよいよ巨きな

曲った刀で、首を落されるとき、署長さんは笑って云いました。「ああ、面白かった。おれはもう、毒もみのことときたら、全く夢中なんだ。いよいよこんどは、地獄で毒もみをやるかな。」みんなはすっかり感服しました。底本：宮沢賢治「ちくま日本文学全集」(筑摩書房) 1991(平成3)年3月20日第1刷発行親本：宮沢賢治全集(ちくま文庫) 入力：古村充校正：野口英司1998年10月17日公開1999年7月23日修正青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

タイトル

巻数

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 サンプルサークル
著者 作者
URL <http://writer.sample.org/>
E-Mail writer@sample.org
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>